

一字書（八月二十二日締切）

課題

畢

- (1) 書体自由
- (2) 半紙タテ ※ヨコは中止
- (3) 落款は余白に調和を工夫し書き入れる
- (4) 出品料 四三〇円
- (5) バーコード券貼付 太枠内の臨昇の隣の空欄に一字と記入 段級は無記入

今月は昇試課題発表月ですが「一字書」は出品出来ませぬ。
推薦取得者始め多くの会員のチャレンジを期待しています。

第二十七回 全国書苑の集い

日時 7月15日（月）祝日・海の日

講演会 午前十時から十一時半 四階 相生

講師 渡部潤一先生 六月号表紙裏に講師紹介文掲載

創玄書道会 一科審査員 墨の研究者

題 「墨を化学して」

懇親会 正午から二時半 三階 おおとり

研究部・推薦合格者の授賞式が行われます。

席上揮毫 高橋香樹 佐野蓉夕 大和田和子

会場 ニューオータニイン東京（2号館）

（JR山手線大崎駅北改札口より東出口方面徒歩2分）

会費 講演 四、〇〇〇円 懇親会 一〇、〇〇〇円

郵便振替送金でお願いします。

申込 定員になり次第締切ります。

半紙課題（予告）（九月二十二日締切）

平岡華雪先生書 琴を鼓して松風に雜る。（葉題）

鼓琴雜
松風

訳：（山間の石上に坐して書を読み）松風に和して琴をかなでる。

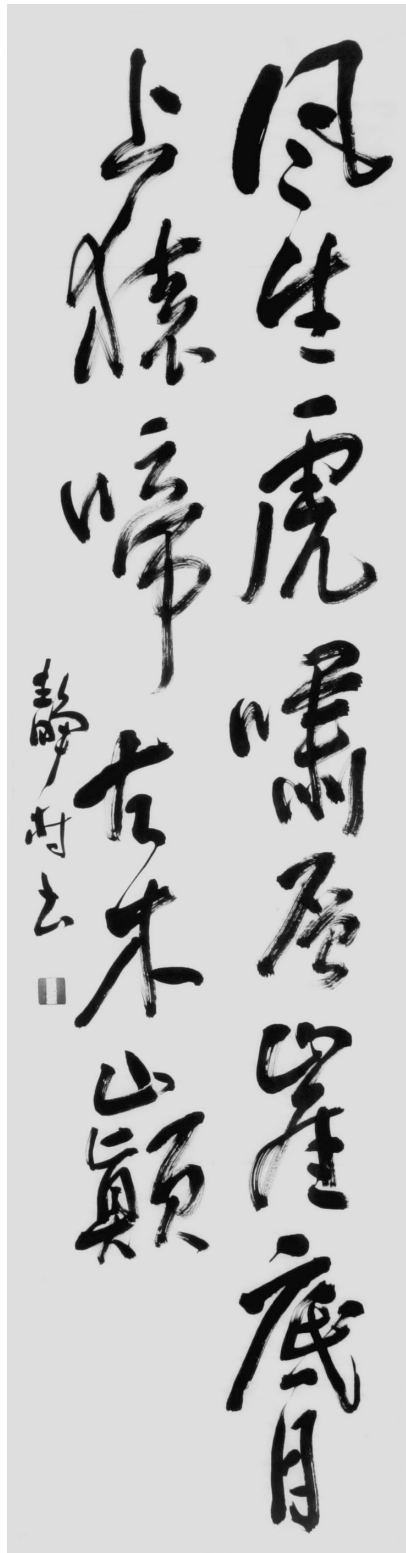
平岡華雪先生書 萩むらのひとゆれしたり初あらし（越央子）

萩むらの
ひとゆれ
たり

あらし
はらひ
よ

A
鈴木静村先生書

風生虎嘯層崖底 月上猿啼古木巔 (勺約)
風生じて虎は嘯く層崖の底、月上つて猿は啼く古木の巔。



B
高橋香樹会長書

風 全三点は続けない。虎 筆順二通り。①ウ冠式②最後に左払い。これは②。嘯 旁の長縦画は突き出さなくて可。長縦画から左点右へ。崖 墨継ぎ。底 点を打たなくても可。また第一画点、終横画もなくとも可。底 末画から月へ連綿。上 筆順二通りで猿へ連綿。古 墨継ぎ木へ連綿。巔 顛の偏旁に工夫。右行、左払いの文字多いが、太細・潤濁・筆意での変化で工夫を。



昇級試験としては、少し難しい課題となりました。単調にならないようにと心掛けましたが、連綿は三ヶ所。無理しないでの連綿。思ったより墨が淡かったので、墨継部(底)と「古」で滲んでしまったが、逆に潤濁の変化がよりわかる形となったのは、怪我の功名か。

訳：風が吹くと岩石が重なった崖で虎がほえる。月が昇ると古木の上で猿がなく。

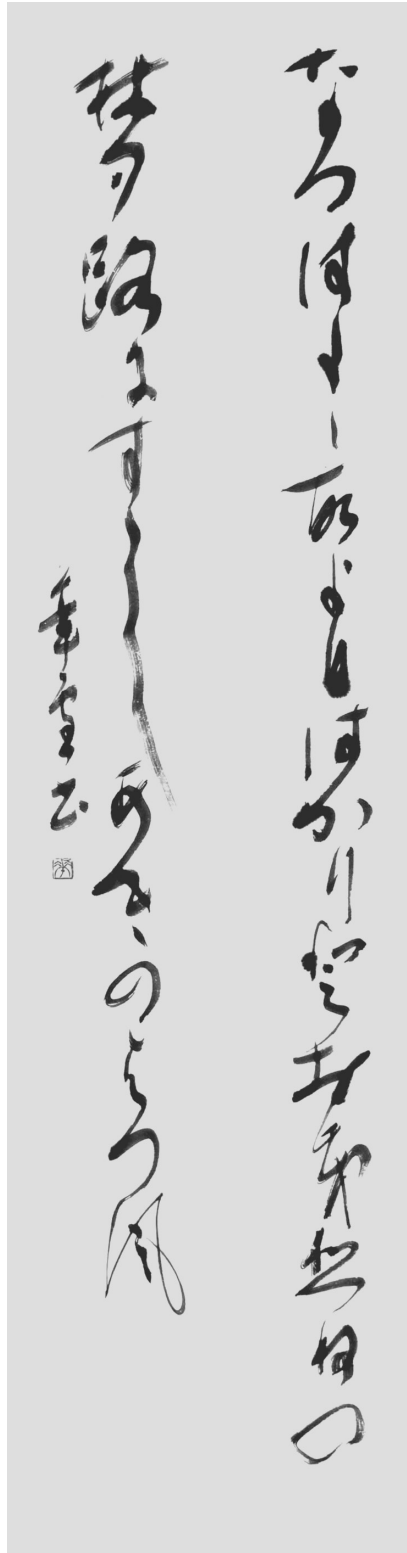
予告 (九月二十二日締切) 陶令日々醉 不知五柳春 素琴本無絃 漉酒用葛巾 (李白)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

A

平岡華雪先生書

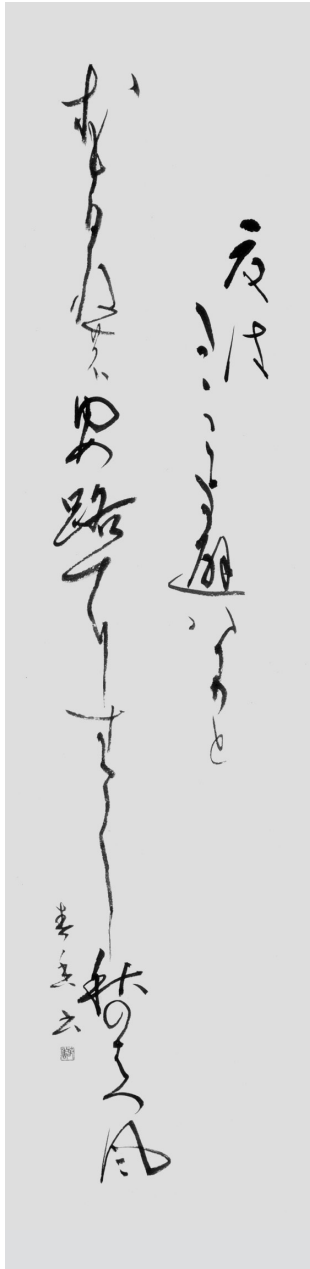
夏はたゞこよひばかりと思ひねの夢路にすゞし秋の初かぜ(金槐和歌集)
なつは多々故よ日はかり登お茂悲ねの夢路尔すしあきの者つ風



B

石原春香先生書

夏はたゞこよひばかりと於も日ね農ゆめ路耳すし秋の者つ風



金槐和歌集 源実朝の短歌集 「金」は「鎌」の偏「槐」は大臣の意。万葉調の歌に佳作が多い。
源実朝 鎌倉時代前期の鎌倉幕府第三代征夷大将軍。

学び方

「夏の暮によめる」とあります。

歌意：夏の終わりあなたを思いつづけながら寝ていると夢の中に秋のすずしい風が吹いて来た。

夏の終わりの肌にさわやかな風を想いながら、右下部に余白を取り秋の初風を感じられるように表現してみました。

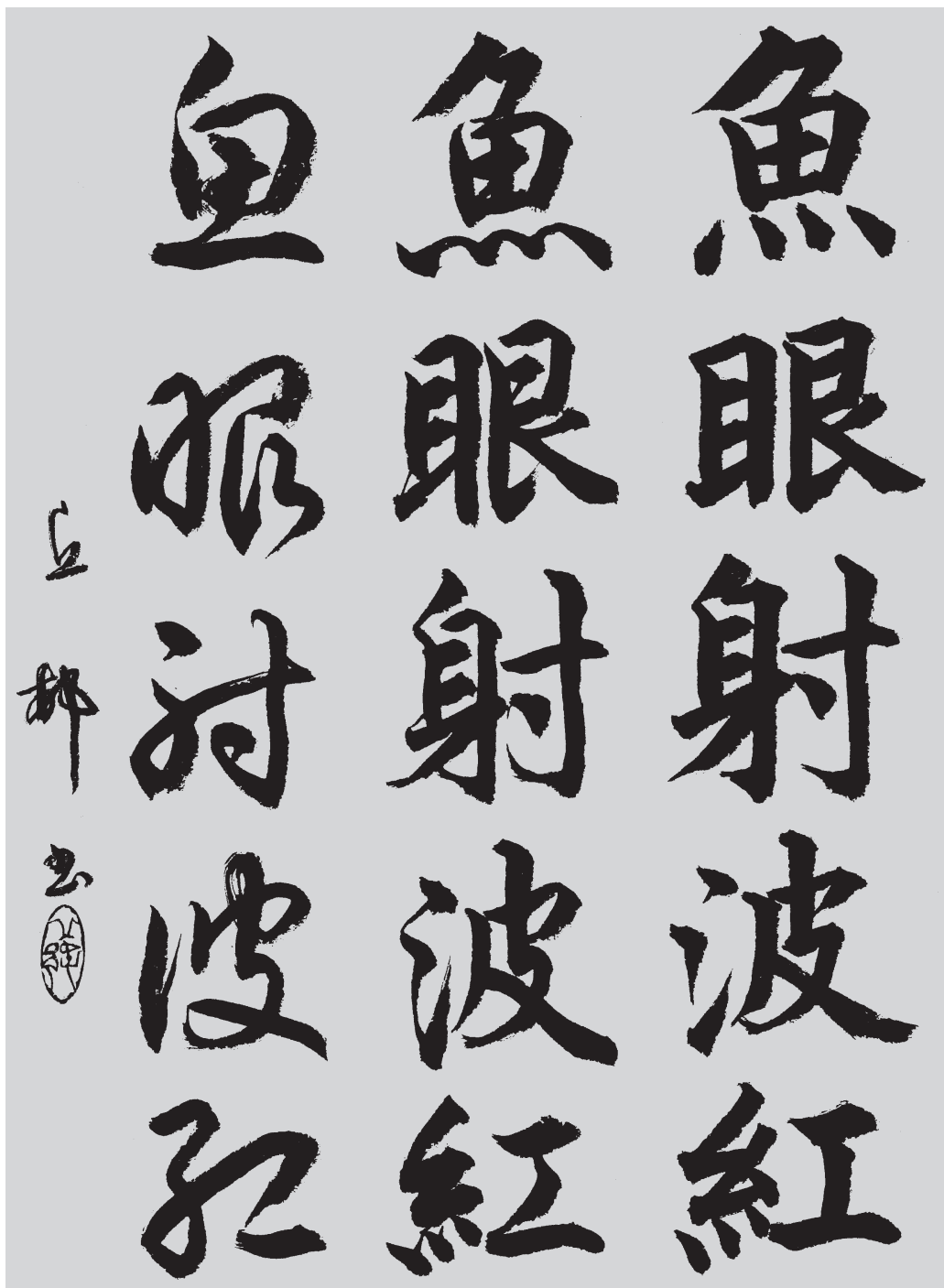
予告 (九月二十二日締切)

東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ (万葉集)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

戸張丘邨先生書

魚眼射波紅(王維)
魚眼ぎょがん 波なみを射いて紅くわいなり



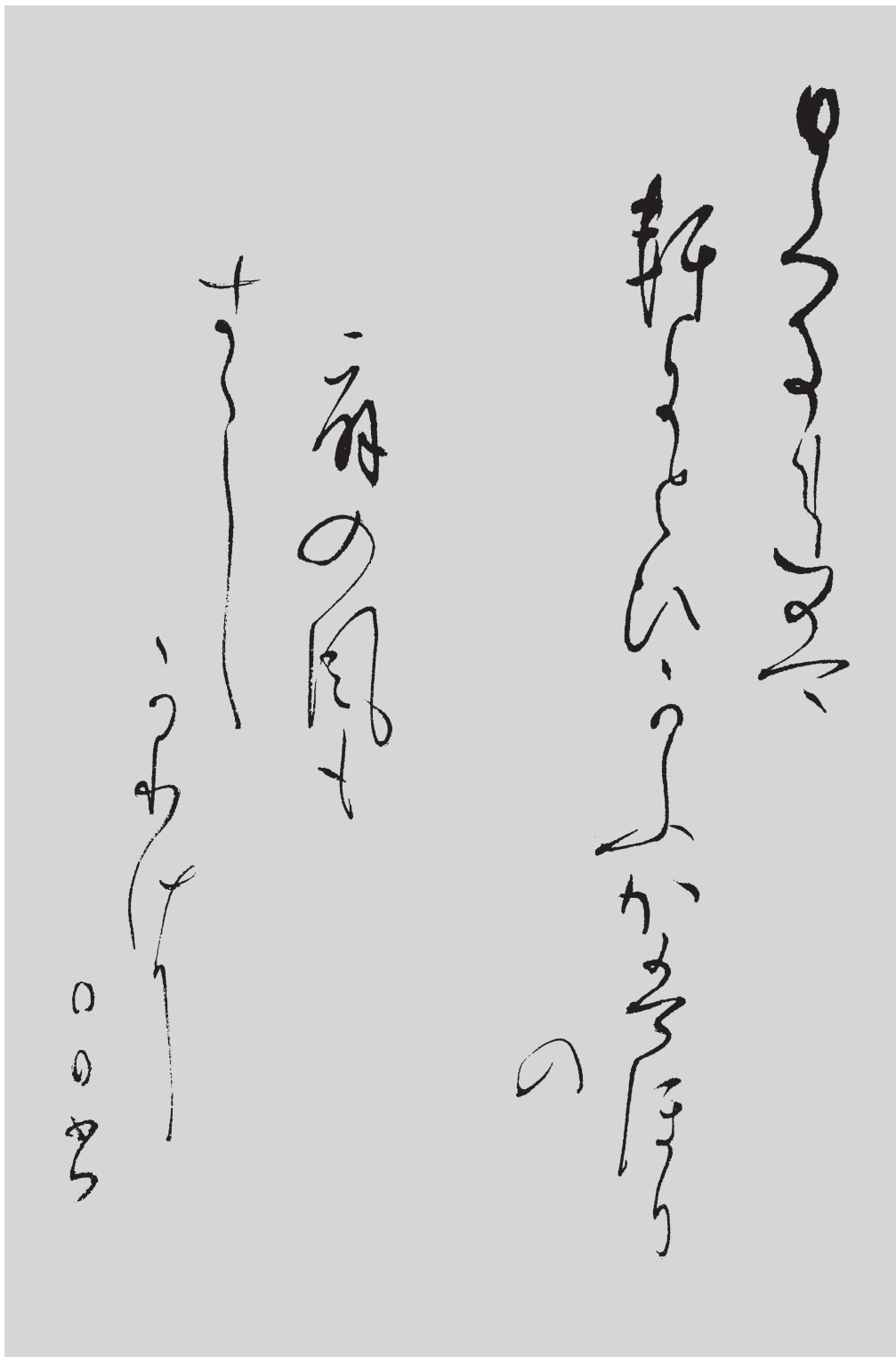
訳：大魚の眼の光は波を射るように輝いて、あたりを紅の色に染めることであろう。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

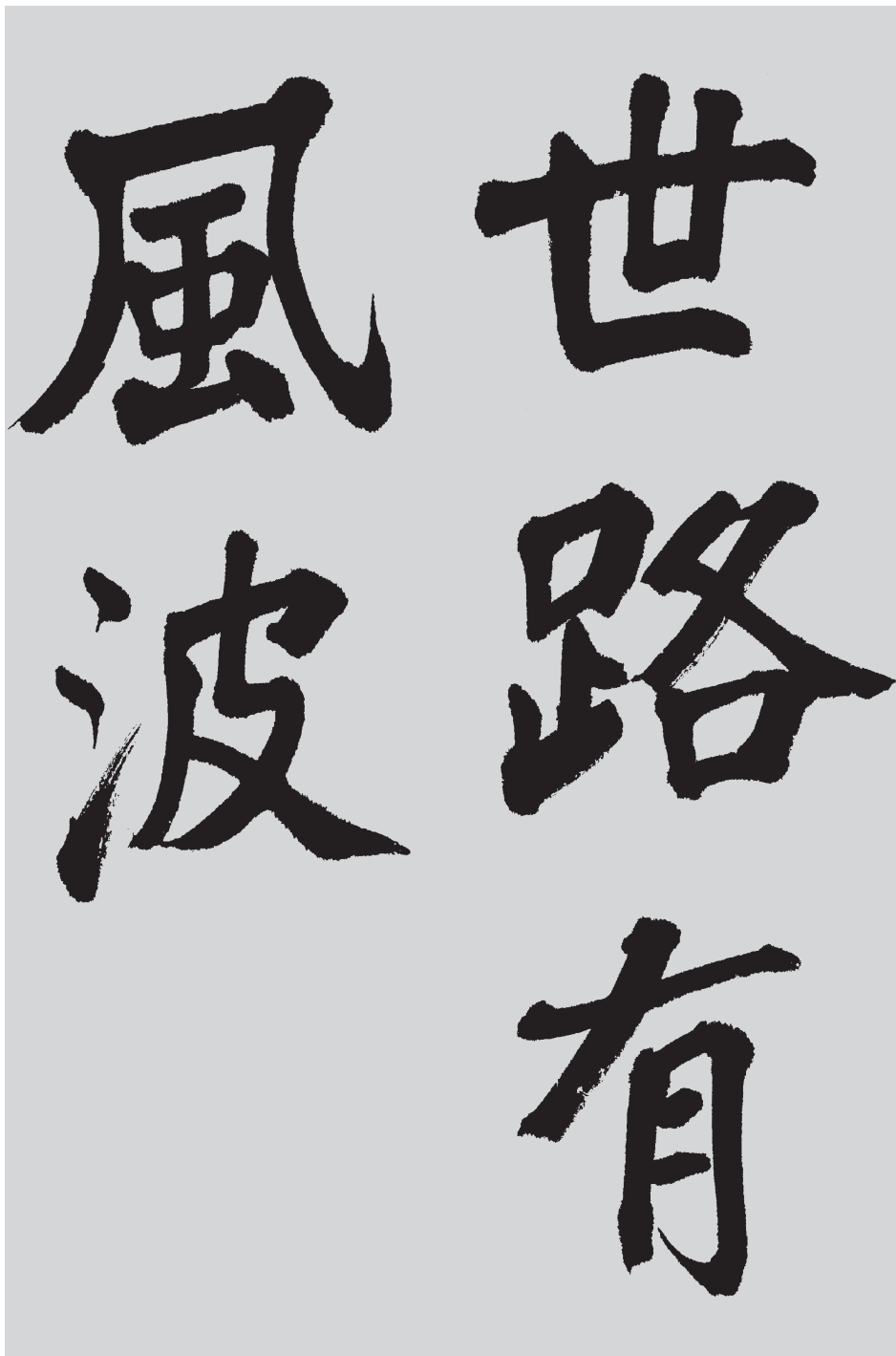
高塚竹堂先生書

日くるれば軒にとびかふかはほりの扇の風もすゞしかりけり(新後撰和歌集)

後徳大寺左大臣



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。



平岡華雪先生書

世路風波有り。(彭炳)

訳：この世を渡るには波荒れ風吹き容易なことではない。

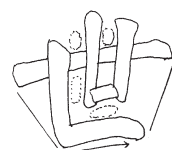
〈主なポイントについて〉

○世 形のとりにくい字、末画で余白を均等にしめる。

○路 右行の中心字、右払いのびやかに。

○風 「風構え」背勢に。

○波 三水偏と右払い大切。

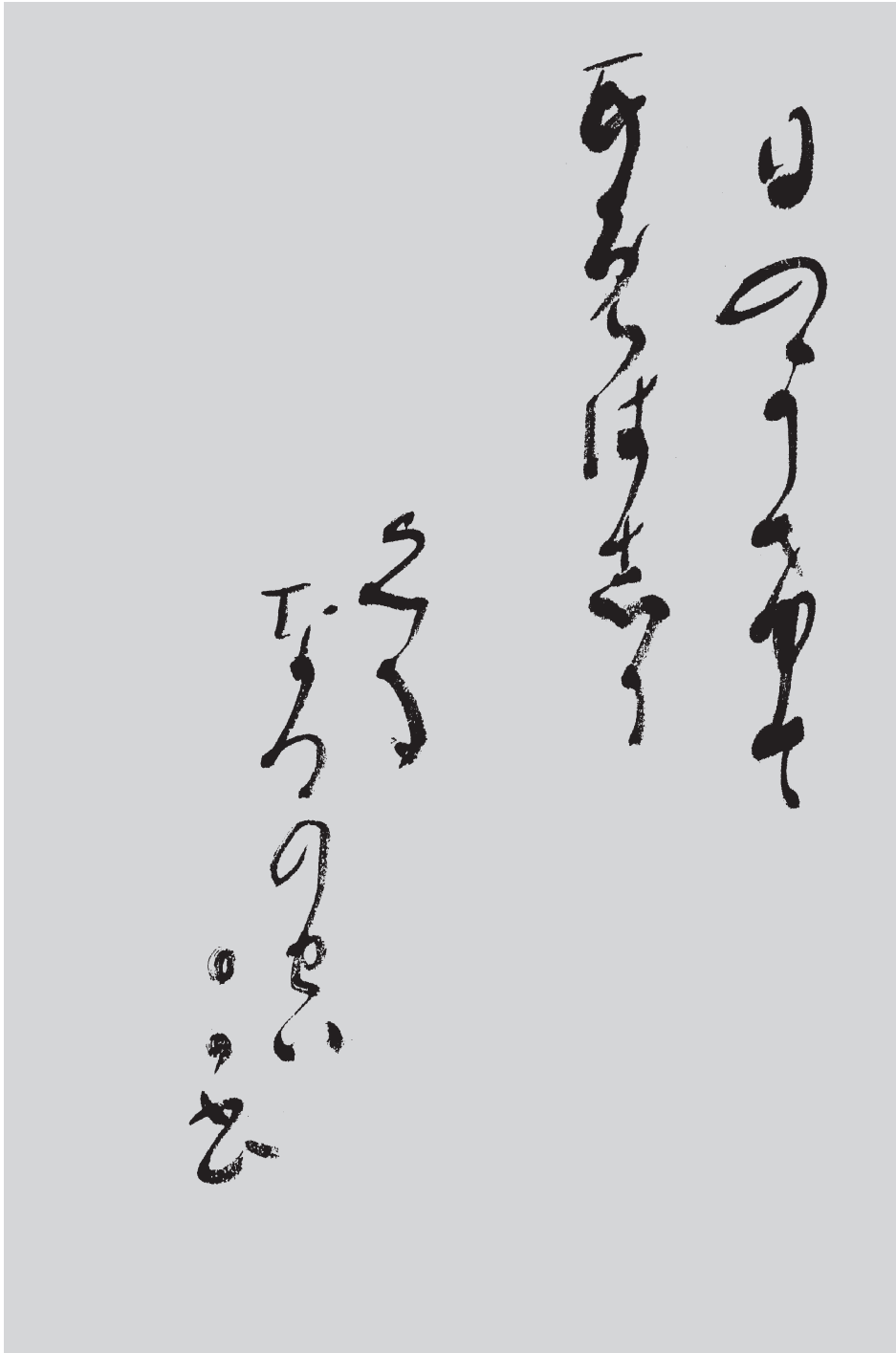


末画で締める

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

平岡華雪先生書

日の受けて雨走り来る夏の空（あふひ）
日のう希けてあ免めは志しり久くるなつの空



〈連綿の習熟について〉

「の」から「う」への連綿、むずかしいが古筆に見受ける。続く「う希て」の連綿、転折も強い受け用筆で共にこの行の注目点。「あ免は志り」は主調部分、「免」から「は」は緊張感。「久る」墨継ぎ、二度目の転折は鋭い。(和漢朗詠「なつ」「の空」二字連綿は口誦みつつ、軽妙に収めたい。)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

石田愁華先生書

水底游魚真見性 樹頭語鳥小參禪（史蕭）
水底の游魚真見性、樹頭の語鳥小參禪。

水底游魚真見性 樹頭語鳥小參禪

訳：水の中に遊泳する魚を見ては、もろもろの妄念を去って真の仏性を見窮める。木の上に鳴く鳥の声を聞くはいささか禅の道を悟るに足る。

鈴木枝豊先生書

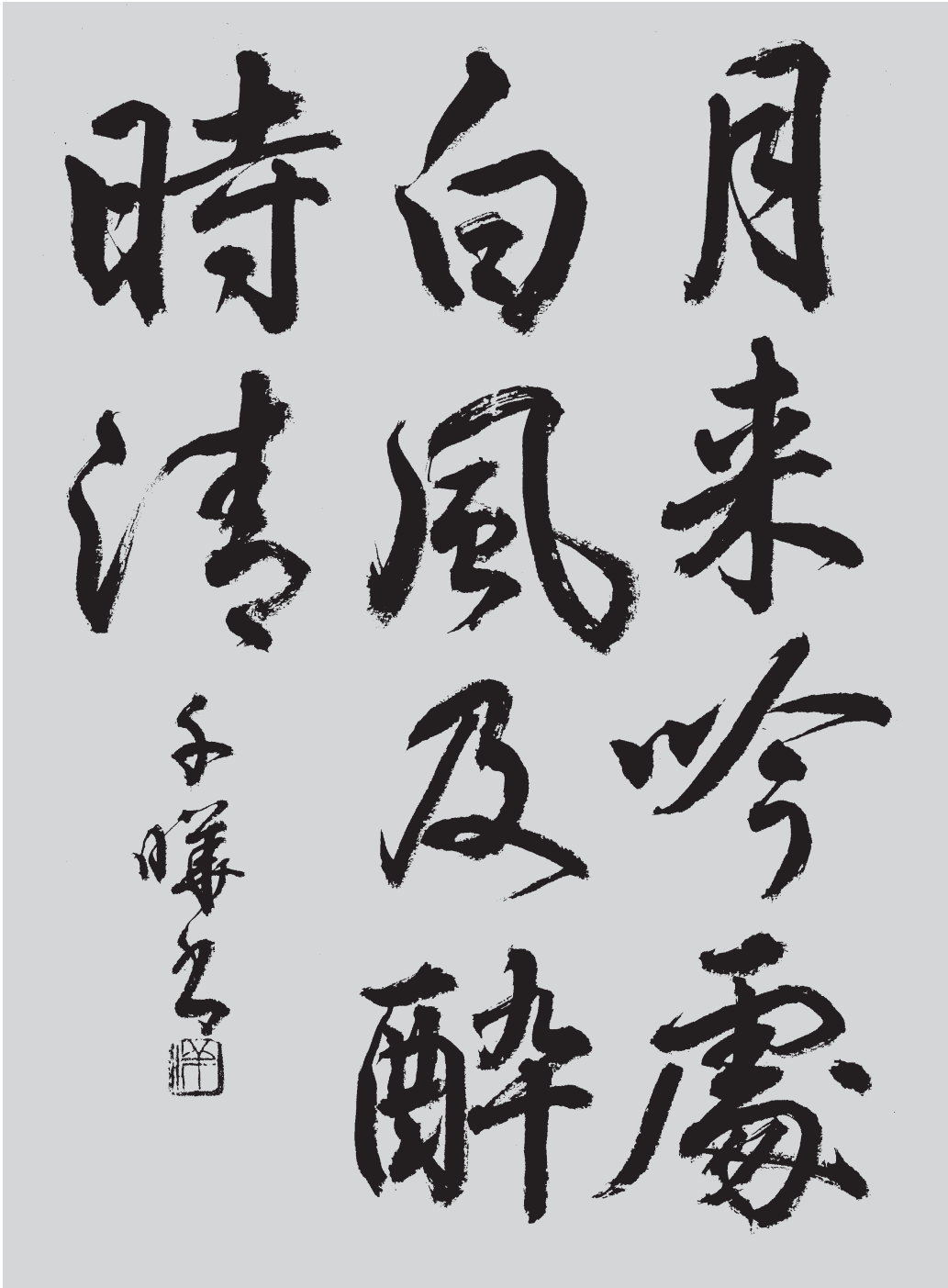
螢飛ぶ野澤にしげるあしの根の夜な夜な下にかよふ秋風（新古今和歌集 撰政太政大臣）
螢とふ野澤二志介るあし能根の夜なく下尔かよふ秋風

螢飛ぶ野澤にしげるあしの根の夜な夜な下にかよふ秋風
物別下よかよふ秋風

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

路川千暉先生書

月來吟處白 風及醉時清（唐子西）
月は吟処に来て白く、風は酔時に及んで清し。

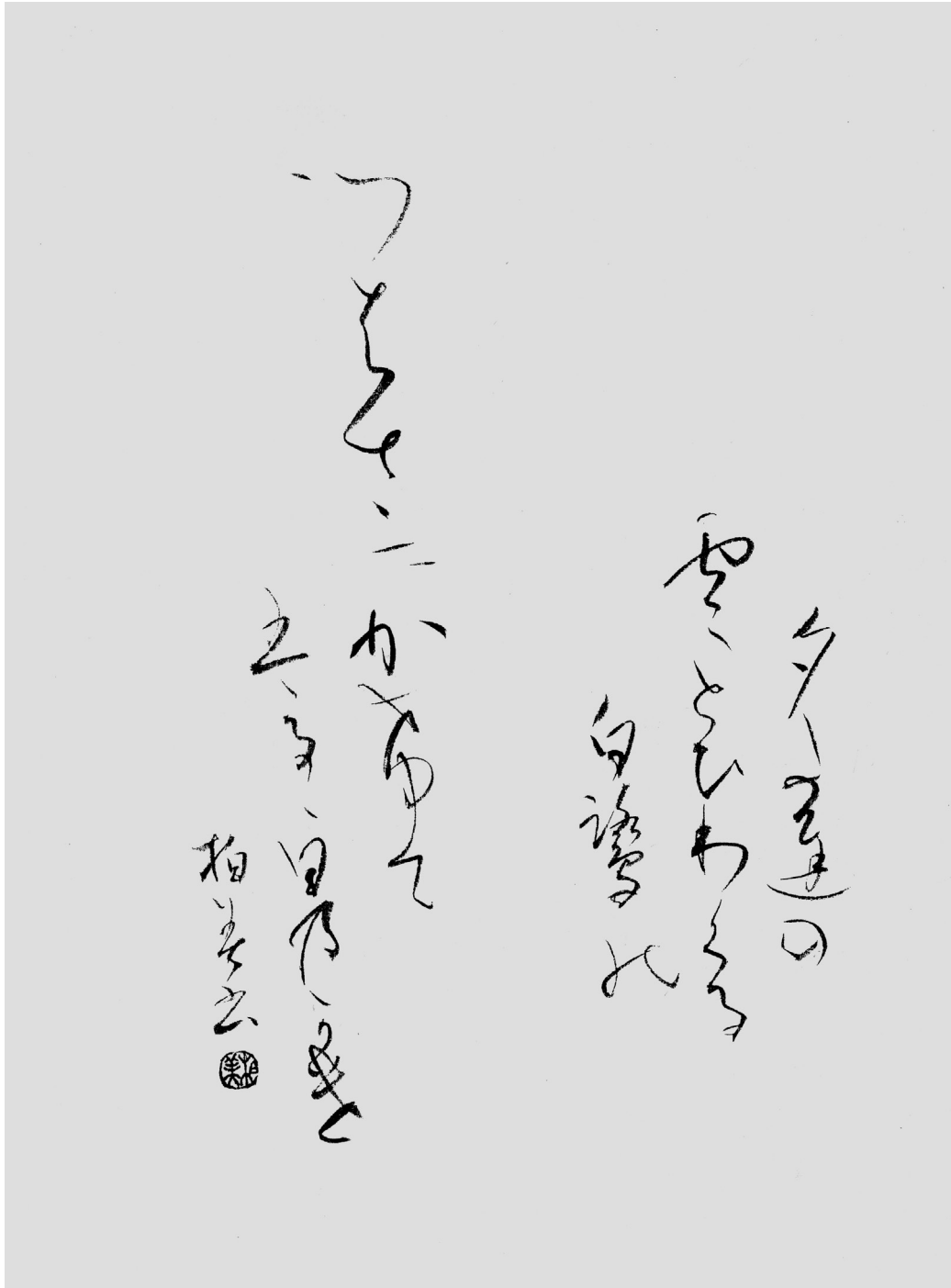


訳：曇りなき月は詩を吟ずる処に光さして明らかに、心地よき風は酒に酔う頃に吹きこんで清い。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

石島柏美先生書

夕立の雲とびわくる白鷺のつばさにかけて晴る、日のかけ（風雅集 花園院）
夕多遅の雲とひわ久る白鷺能川者さ二か希て盤る、日乃可遣



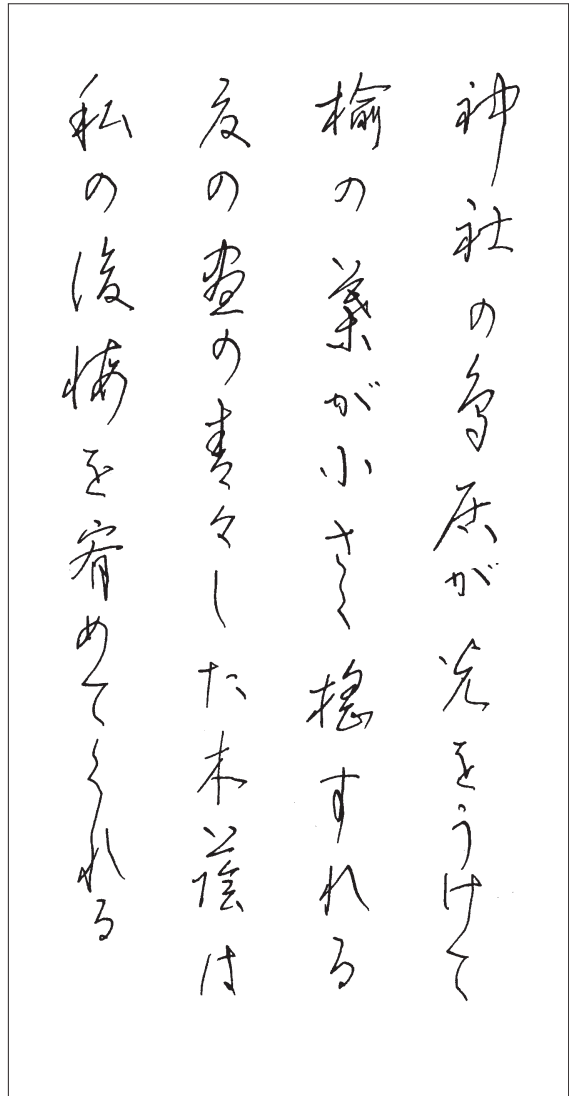
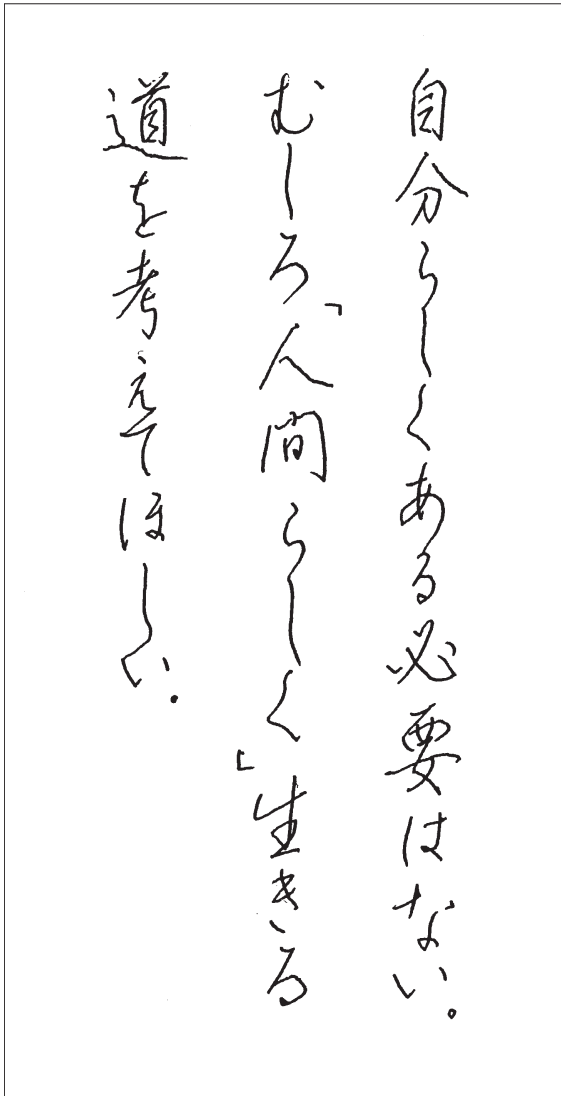
◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

稲畑 曄 穂 先生書

石原 春 香 先生書

課題 2 (初段階以下)

課題 1 (初段階以上)



課題 1 (初段階以上)

神社の鳥居が光をうけて
榆の葉が小さく揺すれる
夏の屋の青々した木蔭は
私の後悔を宥めてくれる

『山羊の歌』木蔭の一節 中原中也

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位) 次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (5) 会員は無料・会員外は四三〇円

課題 2 (初段階以下)

自分らしくある必要はない。
むしろ「人間らしく」生きる道を考えてほしい。

岡本太郎のことば